

第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

環境問題を取り上げる場合、環境を保護することの妥当性はしばしば自明のこととして前提されている。しかし、「環境の保護」が何を意味するかはそれほど明らかではない。これを唱える人々のすべてがこの表現によって同じことを意味しているわけでもない。そして、このような問題においては、表現におけるビミョウな意味の差異が実践上の重大な差異になりうる。

その上、この問題の論議にあたっては、保護されるべき対象として、「環境」だけではなく、「自然」と「生態系」がよく挙げられる。この三者がほとんど同一の意味で用いられることはあるにしても、これら相互間にはニュアンスの違いがあり、場合によってはその違いが重要になる。これらの概念について簡単な分析を試みよう。

まず自然は、近代の自然科学的な見方からいえば、それ自体としては価値や目的を含まず、因果的・機械論的に把握される世界である。人間もちろん自然の一部分であるから、人為と自然の対立はない。人間が自然にどのような人為を加えても、それは自然に反するものではなく、人間による自然破壊というようなことはありえないであろう。自然のある状態とある段階に特に価値があるとする理由もない。すべての事象は等しく自然的である。

だから、「自然を守れ」というスローガンに実質的意味を与えるためには、このような広義の自然の内部において人為だけを特別のものとして位置づけ、この人為による変化をどれだけ受けているかによって自然の価値評価をすることが必要である。これのもっとも極端な立場によれば、人為的変化をまったく受けられない自然が最善であるということになる。このような立場の承認は、人類の文明の歴史を墮落または退化の過程とみなすことをともなう。しかし、いうまでもなく、例外的な状況を除けば、人間は自然に人為を加えることなしには生存できない。人跡未踏の原野や原生林を保存する努力が貴重であるのは、それがキョクチ的なも

のにとどまるからである。このような努力を自然全体に及ぼすことは不可能に近く、万一それが実現するならば、大部分の人間は生存できないであろう。人間の生存を可能にするのは、ある程度の人為の加わった自然である。だから、人類が自らの生存を否定するのでないかぎりには、人間の守るべき自然は、手つかずの自然ではなく、人為が加えられて人間が生存しやすくなった自然であるということになる。

自然は、以上に見てきたように元来は没価値的な概念であり、人間との関連づけによって初めて守るべき価値を付与されると考えられる。では、生態系という概念についてはどうであろうか。

生態系はごく単純には、「ある地域に生息する生物群集と、その生物群集に影響を与える気象、土壌、地形などの非生物的環境を包括した系」と定義される。そして、「食物連鎖が平衡状態に保たれていれば、生物群集の個体数もほぼ変わらず、そのエコシステムは安定している。しかし、人為によりエコシステムに過度の干渉が行われると、生物種を絶滅させたり、さらには生物が生存できないような環境を作り出してしまふ」。また、一般に生物種が少ない生態系ほど生態学的安定度が低いから、生物種の多様性を保つことが重要であるとされる。

この生態系概念には、機械論的に把握された自然の概念とは違って、価値が含まれており、この価値が倫理規範を根拠づける、という考え方があつた。生態系は生物共同体であり、その安定が乱されるならば、多くの種の存続がオビヤカされる。だから、共同体の構成員としての人間にはこの安定をイジめるよう努める義務がある、というのである。アルド・レオポルドによれば、生物共同体の統合、安定、美を保つ傾向にあるものは正しく、反対の傾向にあるものは不正である。このような、生態系または生物共同体の概念からの倫理規範の導出は妥当であろうか。

この点に関連して第一に注意すべきは、生物共同体が人間だけを構成員とする道徳共同体と重要なところで異なっていることである。生物共同体を構成する他の生物たちには権利や義務の意識はない。だから、いずれかの種が生態系の安定を乱すとしても、そのことについてその種の責任を問うことはできない。人間という種は、生態系を他の種よりも大きく乱す可能性をもつという点で特異であろうが、それについて反省し責任を感じずる能力を有するという点でも特異である。

第二に、生態系の安定によって守られるのは種であつて、種に属する個体ではない。種の存続のためにしばしば個のギセイ^eが要求される。生態系を形づくっているのは種のレベルで巨視的に見れば共存関係であるにしても、個のレベルではほとんどが弱肉強食の関係である。生態系の安定と平衡は、構成員の平和的共存によってではなく、弱肉強食を主体とする食物連鎖によって成立しているのである。だから、生態系の中で人間がどう生きるべきかを指示する倫理が、人間の共同体における倫理との類比によって簡単に導出されるわけではない。^フ個人の生命の尊重という人間社会の倫理を動物の個体に適用することが、かえつてその動物種の破滅を招くというようなことも起こりうるのである。

以上の考察は、生態系そのものに価値があるということを必ずしも含意しない。^エ生態系概念には、機械論的に把握された自然概念よりも豊かな内容が含まれているといえるであろう。しかし、それに価値が内在しており、その価値が生態系を守るべしという人間の義務を根拠づけている、と断定するのは難しい。その理由の一つは、生態系の安定が望ましいとされるが、その安定した状態がただ一つではなく多くありうる、ということにある。ある生態系における甲という安定が乱されても、やがては乙という新しい安定が生じるであろう。その場合、甲のほうが乙よりも望ましいとする根拠はない。また、生態系の安定にとって、一般的には生物種の多様性が望ましいとされる。だが、比較的少数の生物種から構成される生態系もあり、これが多数の生物種から成る生態系よりも価値において劣ると断定する理由もない。だから、生態系そのものにとっては、ある安定の状態に特に価値があるという判断は成立しない。しかし、人間にとってはそうではない。どのような安定でもよいのではなく、自らが快適に生存できる安定の状態こそが貴重である。だから、人間が「生態系を守れ」と叫ぶときの生態系とは、実は人間の生存にとって好都合な、生態系の特定の状態にはかならないのである。

環境という概念は、自然や生態系とは異なり、ある主体を前提する。いうまでもなく、いま問われているのは人間という主体にとっての環境である。保護されるべきは人間が健康に生存することができる環境である。だから、環境保護は第一義的に人間のためのものである。

以上の考察が正しいとするならば、「地球を救え」とか「自然にやさしく」といった環境保護運動のスローガンは不適切である

ことになる。このような表現は、人類が自らのためではなく地球や自然のために利他的に努力する、というニュアンスを含むからである。人類が減びても、地球や自然はなんらかの形で存続しうるであろう。われわれが守らなければならないのは、人類の生存を可能にしている地球環境条件である。だから、われわれの努力を根本的に動機づけるのは人類の利己主義であり、そのこと^オの自覚がまず必要である。

[注] ○アルド・レオポルド——Aldo Leopold (一八八七—一九四八)。アメリカの生態学者。

設問

- (一) 「すべての事象は等しく自然的である」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「元来は没価値的な概念であり、人間との関係づけによって初めて守るべき価値を付与される」(傍線部イ)とあるが、
どういふことか、説明せよ。
- (三) 「個人の生命の尊重という人間社会の倫理を動物の個体に適用することが、かえってその動物種の破滅を招くというようなことも起こりうる」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (四) 「生態系の概念には、機械論的に把握された自然の概念よりも豊かな内容が含まれているといえるであろう」(傍線部エ)とあるが、どういふことか、説明せよ。

第二 問

次の文章は、唐土へ出立する息子成尋阿闍梨を思う母のものである。作者は成尋のもとにいたが、門出の直前にそこから仁和寺へと移された。そのことを嘆き、作者は成尋に別れを悲しむ歌を送った。その翌朝、成尋から手紙をもらったところから、この文章は始まる。結局成尋は、母に会わずに出発してしまった。これを読んで、後の設問に答えよ。

その朝、文おこせ給へる。つらけれど急ぎ見れば、「夜のほど何事か。昨日の御文見て、よもすがら涙もとまらず侍りつる」とあり。見るに、文字もたしかに見えず。涙のひまもなく過ぎ暮らす。

からうじて起き上がりて見れば、仁和寺の前に、梅の木にこぼるるばかり咲きたり。居る所など、みなし置かれたり。心もなきやうにて、いづ方西なども覺えず。目も霧りわたり、夢の心地して暮らしたるまたの朝、京より人来て、「今宵の夜中ばかり出で給ひぬ」と言ふ。起き上がられて、言はん方なく悲し。

またの朝に文あり。目も見あけられねど、見れば、「参らんと思ひ侍れど、夜中ばかりに詣で来つれば、返す返す静心なく」とあり。目もくれて心地も惑ふやうなるに、送りの人々集まりて慰むるに、ゆゆしう覺ゆ。「やがて八幡と申す所にて船に乗り給ひぬ」と聞くにも、おぼつかなき言ふ方なき。

船出する淀の御神も浅からぬ心を汲みて守りやらなむと泣く泣く覺ゆる。

「あさましう、見じと思ひ給ひける心かな。あさましう」と、心憂きことのみ思ひ過ぐししかば、また「この人のまことにせんと思ひ給はんことたがへじ」など思ひしことの、阿闍梨に従ひて、かかるともいみじげに泣き妨げずなりにし、この日ごろの過ぐるままにくやくしく、「手を控へても、居てぞあるべかりける」とくやくしく、涙のみ目に満ちて物も見えねば、

しひて行く船路ふなぢを惜しむ別れ路ぢに涙もえこそとどめざりけれ

〔注〕 ○八幡——京都府南西部の地名。淀川に面し、石清水いwashimizu（男山おとこやま）八幡宮はちまんでうがある。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウを、わかりやすく現代語訳せよ。

(二) 傍線部エはどのような作者の心情を述べたものか、説明せよ。

第三 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

孔子曰、「導之以政、齊之以刑、民免而無恥。導之以德、齊之以禮、有恥且格。」老氏稱、「法令滋章、盜賊多有。」太史公曰、信哉是言也。法令者、治之具、而非制治清濁之源也。昔天下之網嘗密矣。然姦偽萌起、其極也、上下相遁、至於不振。當是之時、吏治若救火揚沸、非武健嚴酷、惡能勝其任而愉快乎。言道德者、溺其職矣。漢興、破觚而為圓、斲雕而為朴、網漏於吞舟之魚、而吏治烝烝、不至於姦、黎民艾安。由是觀之、在彼不在此。

設問

〔注〕

- 政——法律。 ○老氏——老子。 ○太史公——司馬遷。 ○制治——定める。 ○姦——邪惡。
○萌起——芽生える。 ○救火揚沸——沸騰した湯をかけて火を消す。 事態が切迫していることのたとえ。
○武健——勇猛な。 ○破觚而為圓——四角いものを円くする。 ○雕——彫刻。 ○烝烝——純良なさま。
○黎民——人民。 ○艾安——よく治まる。

- (一) 「法令者、治之具而非制治清濁之源也」を、「清濁」が何を意味するか明らかにして、平易な現代語に訳せ。
- (二) 「非武健嚴酷惡能勝其任而愉快乎」を、平易な現代語に訳せ。
- (三) 「網漏於吞舟之魚」は、どのようなことをたとえているか。簡潔に説明せよ。
- (四) 「在彼不在此」には、筆者のどのような主張が込められているか。簡潔に説明せよ。